シリーズ隠れた建築紹介～大野からくり記念館～

先日、最近完成したばかりの「大野からくり記念館」に行って来ました。名称の通りこの記念館は、大野町にあります。大野町は、金沢港の近くに位置しています。

大野町は昔から醤油の町です。町を歩くと防砂のための松林と、醤油の倉が何軒か続くのが目につくことでしょう。そして、醤油のにおい。何となく、ほっとするものがこの町にはあります。

「大野からくり館」は、この大野町の端にあります。場所的にこの記念館は、隠れた建築といえるかもしれません。なぜなら（とても残念なことなのですが）記念館に行く手段がとても少ないのです。金沢駅からでは、タクシーでしか行けません。ただ少し歩けば、バスで大野町まで行けるので、大野町の町を楽しみながら記念館に行くことが出来るでしょう（たぶん……）。

記念館では、幕末の科学技術者・大野弁吉を中心としたからくりの世界と、その人物背景や才能、活躍ぶりなどを、パネルや実物資料で紹介しています。しかし、もう癖になっているのでしょうか、展示室に入った途端、私は展示物より先に展示室を見回していました。からくりの世界へ違和感なく入ることの出来る空間。展示室自体が、（言葉は変ですが）からくりのような印象を受けます。

さて、歳を取ると（と、いうほどの歳ではないのですが）、どうしても感想が上のようにまわりくどくなってしまいます。そこで、一緒に行った9歳の弟に、一言、建物の感想を言ってもらいました。

「すげぇ、かっこよかった。」

青い海と空が、とても記念館に似合っていたので、晴れた日に行くことをお勧めします。

―石川高専学生・久保綾子

富山支所第１回交流会開催される

昨年の９月29日、北陸建築文化賞を受賞された写真家風間耕二氏を講師に、『私の好きな富山・気になる富山』と題して講演会を催しました。「私は、決して告発写真家ではありません。ただこの指がシャッターを押してしまうんです」と、美しい自然やオヤッと思わせる風景を何枚もスライドで見せて頂きました。講演のあとの交流会では会員相互の交流を深め、楽しい一時を過ごすことができ、２次会、３次会へと秋の夜は更けました。

―彩子

（ご紹介が遅くなりましたが、各支所活動の一層の盛り上がりを期待して掲載させていただきました―広報部会長）

支部インフォメーション

■「建築文化週間'96」北陸支部企画事業

建築探訪「富山に世界遺産―五箇山の合掌集落」

日時：６月15日（土）９：00～16：00

見学先：平村相倉合掌集落、上平村菅沼合掌集落

定員：40名（申し込み先着順）

参加費：２，000円（昼食代など）、当日徴収

申込方法：往復葉書に氏名、勤務先、所属、同住所、電話番号を明記して富山支所宛に申し込む。

日本建築学会北陸支部富山支所／〒930　富山市愛宕町２丁目４　建築士会内　TEL　0764－33－1254

■平成８年度「親と子の建築講座」（新潟）

第１回　７／13（土）９：30～12：00「今日は私も設計士」
講師：五十嵐由利子（新潟大学教授）
会場：新潟市内予定

第２回　９／28（土）10：00～12：00　新潟市内

第３回　11／９（土）10：00～12：00　上越市内

詳細は「建築雑誌」をご参照ください。

■96年度北陸支部大会

研究発表会等　７月26日（金）

会場：福井県立大学福井キャンパス

８：45開会式、９：00～13：50研究発表会、14：00～16：30シンポジウム（テーマ『開口部の安全性と快適性』）

16：30～19：00北陸建築文化賞表彰式・作品発表・懇親会（会費３，000円／学生１，000円）

見学会　７月27日（土）９：00～14：30

場所：サンドーム福井、朝倉氏遺跡（JR福井駅東口発着）

会費：２，000円程度（昼食含む。内容により変更）

定員：50名程度

申込先：日本建築学会北陸支部福井支所／〒910　福井市文京３－９－１　福井大学工学部環境設計工学科内（TEL　0776－23－05002632　FAX　0776－27－8746）

■支部共通事業「全国大学・高専卒業設計展」

福井（福井県立美術館）６／14（金）～６／16（日）
石川（金沢工業大学）　９／25（水）～９／28（土）
長野（信州大学）　10／９（水）～10／11（金）
新潟（新潟大学）　10／15（火）～10／17（木）

■「ベルギーの工学デザインとルネ・グレイシュ」展

８／22（木）～９／１（月）富山美術工芸専門学校
10／１（火）～10／５（土）福井県立美術館

日本建築学会北陸支部ニュース「AH！」第７号

発行日　1996年６月１日

発　行　日本建築学会北陸支部広報部会

松澤　茂（新潟）　尾久　彩子（富山）
船戸　慶輔（石川）　増田　達男（石川）
桜井　康宏（福井）　土本　俊和（長野）

事務局　室田　文男・瀬口さゆり
〒920　金沢市玉川町５－15
TEL　0762－20－5566　FAX　0762－60－1502

AH! HOKURIKU

第７号

特集

富山人気質を斬る

支部ニュース「AH！」の第７号をお届けいたします。広報部会も発足以来３年目に入りましたが、６名の委員のうち３名が新人に交替して気分を新たに再出発……、と思った矢先に広報部会長の手違いで発行が１ヶ月の遅れとなってしまいました。お詫び申しあげます。

前号からメインテーマとして取り上げている「北陸らしさ」について、今回は、富山でさまざまな分野で活躍されている５名のユニーク人間にお集まりいただき、活発なご議論をいただきました。スポーツから教育、文化、商業、生涯学習、コミュニティ、そして住居から景観問題まで広範な話題に触れながら、日韓比較文化論をまじえて富山人気質の真相が浮き彫りにされています。テープ起こしの生原稿は、A４ワープロで実に50枚という膨大なものですが、ごくごく一部しかご紹介できないのが残念です。

富山県人気質を斬る

スポーツ界にみる県民性

秦：小野さんは水泳の選手としてよく海外に遠征に行かれていますが、富山の人ってすうっと馴染めるもんですか？

小野：関西とか関東の人って明るいというか、積極的で発言力があるというか……。私はちょっと引っ込み思案の方だからかえって可愛がってもらって、不思議がられますよ。何か変な言葉を喋ってるというか……。で、真似されたりして、そういう感じで仲良くなっていくんですよ。

小野　郁さん
水泳選手として国際大会で活躍。現在、後輩の指導にあたる。

重松：そういった意味では、変わっているとか少数派とかいうのはいいよね。

小野：レベルが上に行くほど、自分がすごいなって思っていた選手たちから声がかかったり……。今で言うと千葉すずとか、そういう方がいるんですけど、圧倒されるんですよ会場に行っても。

中山：あっちは自信満々の顔しているんだもんね。

小野：でも、私は常になんていうか、自分の考えとか作戦とかを誰にも言わないで……。

中山：富山県人だ！。

小野：そういうところは富山県人なんですよね。表面では何考えてんのか分かんないような所……。

中山：本当は一番よく考えているんだよね。

小野：でも私、人と対しての競技とかダメなんです。自分のコースを行って見てきて終わり……っていうんなら得意なんですけど。

中山：私はラグビーをやってましたが、彼女の話聞いてたら、何だかホッとするんですよ。ちゃんと皆の中にいるんだけども、妙に自己主張とかそういうのはしないんです。『ところでお前』と機会を与えられて喋ると、やっぱ変わっているのも一つあるけど、えらい新鮮な発言が出るみたいです。

中山安治さん
元ラグビー選手で酒屋を営む。ワインアドヴァイザー・酒匠アドヴァイザーとしても活躍中。

小野：ああ、そうです。それで面白がられる……。

中山：そうそう。結局俺も面白がられてきたんですよ。

小野：でも、関西の人とか関東の人って、言葉で全部表現するって感じで喋りまくる。私から見たら、それもまた新鮮なんですよ。富山の人は、こう、言いたくても傷つくかなとか、言わない方がいいかなという方が強いから黙っている……。

韓国女性からみた県民性

天坂：今のお話、私たちからみると非常に戸惑ってしまうんです。他の友達もみんな感じているのは、富山の人はものを言ってくれない。「傷つくかな」といった思いやりがあってのこととは誰も分からないんです。

秦：思いやりがあって言わないのかな？

小野：思いやりもあるけど、やっぱりコミュニケーションとるまでの努力というか、そういうのが少し足りない。で、どうしても同じ県人同志とかニュアンスで分かるような者同志で固まって……。

天坂：今となっては、私が入っていけば相手も開けてくれると分かってきたんだけれど、自分の生きてきた中での『心をこれだけ開ければ相手もこのくらい開けてくれるだろう』ぐらいではダメだったんですよ。

天坂仁美さん
韓国から富山へ嫁に来て韓国の文化を富山に紹介。

重松：どうですか？。韓国の女性と富山の女性とか日本の女性を比べたときに……。

天坂：女性というよりも、人間そのものの自己表現の方法が違う……。むこうは喧嘩をしてもいいから、喧嘩の方が沈黙よりも大事なんです。日本は違う。

広報：『沈黙は金なり』なんてことがあるんですね。

天坂：物事を解決するためには喧嘩でもいいから、やっぱり会話がいる……これが基本だと思うんですよね。でも富山は違う。そういう風にやったら大変なことになる。だから最近は、良く言えば丸くなったし、悪く言えばズル賢くなったかな。

田舎コンプレックスか？

中山：富山人が喋らないのはいくつか理由はあるけれど、『田舎もんだから』みたいなところがあるような気がします。

重松：いやー、どうでしょう。『ところがなんの』というところが結構ありますよね。

小野：『言わせたらスゴイぞ』みたいな。

重松：ただ勝負する前から負けた気持ちになるのって嫌だよね。

秦：そんなこと今はもう無いんじゃないの？。

重松：まだまだありますよ。建築の話でいえば『東京の何何先生の作品です』みたいな……。地元で持っている例えば先祖だとか、そういうのが培ってきた流れみたいなものを『ブランドです』という風に切られたりすると、『ああ、これは何なのか？』と……。

重松栄一さん
蔵を改装して、レストランと洋品店を営む（AH！第３号の隠れた建築紹介）富山にこだわりを持ちつづける文化人。

秦：富山ってのは『これにしよか』って選べるからいいなって思ったんだけど、選んでないの？

中山：僕は酒の立場で見ていると、県外のものを確かに選べるという要素もありますけど、おらが町のものは大事にというか、高い評価をしようとしないんです。僕らは本当に田舎者でしたけど、今の子供はそんなことないはずなんですが、それでもやっぱりどこかに『おらが町のものよりも外がいい』という感じがあるんですよ。

小野：スポーツでもあると思います。私は今までのコーチについて練習したかったんで地元の大学を選んだんですね。それがやっぱり『なんで東京行かんかったんけ』とか『もったいない』とか言われるんです。

天坂：何年か前、商工会議所が『富山の何にプライドを持っているか？』というアンケートをしたんですよね。あの数字を見てビックリしたのは、『何も見せるものがない』っていう答が多かったんですよ。

田舎の風習と田舎の自信

天坂：裏返してみると、自分の町に対する理解とかが無いのかな……としか思えないわけですよ。『田舎、田舎』って言うけど、私に言わせると、田舎だからいいんですよ。昔、富山に来た時はもう死ぬかと思ったんだけど、今ソウルに帰ったら死ぬかと思いますね。

中山：リアルだね。どうして？

天坂：あのね……、空間と時間と人の流れというのがゆったりしているんですよね。私なんて立山大好きなんだけど、それがもう日常生活になっているから恵まれ過ぎているんですよ、富山は。

中山：空間が広くて、なおかつ話をしてくれない。それは結局、人と人の『間』が広いんですよ。その話でね、富山の人は外から来た人を『旅の人』と言うんです。お嫁さんも『旅の人』、ここで生まれ育っていない人は『旅の人』なんですね。この『旅の人』を見張るっていう風習がある……って言うんです。

秦：窺ってるわけですね。

中山：そうです。気持ちのうえで見ているそうです。小さいコミュニティだから何でもばれてしまう。となると、必然的にみんな悪さをしなくなる。

天坂：私たちから言わせてもらうと陰気ですよ。

秦：友人何人かにこのことを聞いてみたら、陰気、閉鎖的、保守的、そのうち根性悪い……だとか、そんな悪いところがいっぱい出てきました。それが向上心に結びつくってことはないんでしょうか？

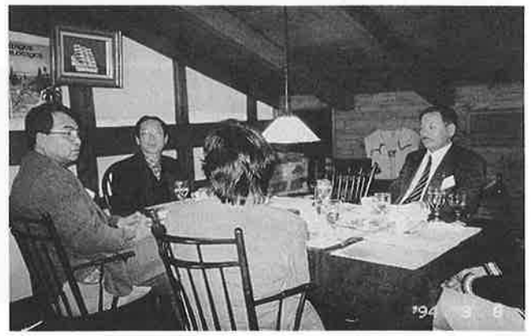
秦　正徳さん
京都生れ、富山在住。コーディネイター役（高岡短期大学）

中山：僕、富山が好きだからなんですけど、閉鎖的でも何でも、全然悪くとらえていないんです。僕は自分で『ぐうたら』って。それを全然喋らないから陰気だと言われても困る。それは非常に「知的」なんです。

家と土地とコミュニティ

秦：田舎者いやだっていうのを通り越して、田舎者でなんで悪い！……っていうのはないんですか、本当に。

重松：学生時代の４年間ぐらいは東京行ってこい、京都



へ行ってこい、みたいな部分はあるんじゃないかな。

天坂：それは戻ってくるって信じて……。私、ここに暮らしていてどうしても分からないのは、長男だから戻ってくるとか、この家や土地を守ってくれとか……。韓国も日本以上に血のつながりは強いけど、家や土地に対するつながりじゃないんです。

中山：僕らは農耕民俗で、この土地が命みたいなものなんですよ。これはうちの女房も理解できないんです。

天坂：そうでしょう。だって家というのは人間がくつろぐためにあるんであって、人間がその家に縛られるわけはないんです。

中山：でも、これからはどうかな。天坂さんのような人が3人ほど居れば、ひっくり返りますよ、小さな村がね。僕はその方が面白いと思っている。

天坂：人のことは、私は居ない所では口に出さない。うちの子供にも『人のことは、良いことであろうと悪いことであろうと、人の前で言いなさい。自分が考えていることははっきり言いなさい』ときつく仕付けてます。富山の県民性からいったら望ましくないような子供に育つかもしれませんね。

中山：ところで、韓国では家に鍵を掛けてますか？

天坂：必ず掛けます。まず塀がありますね。

中山：富山のほうは、とくに散居村は全く鍵を掛けない。そういう習慣がないんですよね。裏を返せば、非常に仲間を信じてるっていうか。

天坂：でも、私あれは良くない習慣だと思います。

中山：そうなんです。最近、盗難など社会性として良くないということになって、鍵を掛けている。

天坂：韓国は部屋ごとに鍵が掛かります。鍵の掛からない部屋で寝るなんて落ちつかない。韓国人は家族・血族とは言うものの、一人の人格も守られている。

生涯学習から未来へ

秦：天坂さんがお子さんの躾のこと話されたでしょ。富山って、塾へ行く人は少ないんじゃないですか？

小野：多いですよ。家庭教師とか多いでしょ。

秦：そういう教育熱心さっていうのは、富山人のなんかあるんですか？

中山：学習塾だけじゃなくって、習い事については富山の人はよくします。好きなんですよね。

天坂：生涯学習っていって、大人もやっているんだよね。私、あれは大賛成なのね。

中山：すごいですよ。この間、県の生涯学習で「ワインの楽しみ方」って講座を一つもつことになったんですが、20人のところ130人も来るんです。閉鎖的だったのに、この習い事好き……。自己主張はしないんだけど、自分も参加しているっという、それで満足しているのかな。

小野：孤立しているとなんか寂しいから、やっぱりどこかに行って、なんかしてこようかなあって……。

重松：どうなんでしょうね。こういった形で新しい『らしさ』みたいなものが出てくるんでしょうか？

中山：かもしれませんね。パワーのある県民ですから。

重松：単純に自信持てばいい。そのまんまでいいじゃない。優越観と劣等観っていうのは裏表……。

天坂：そうなんだよね。で、さっきの続きだけど、やっぱり自分の表現を積極的にしてほしい。ここの良さが分かるのに10年もかかったんじゃ大変。そして、『他県の人と違う』ということをむしろ大事にするような県民性を育てて欲しいなと思います。

秦：それが、創造というか、創ることに結びつくってことですね。

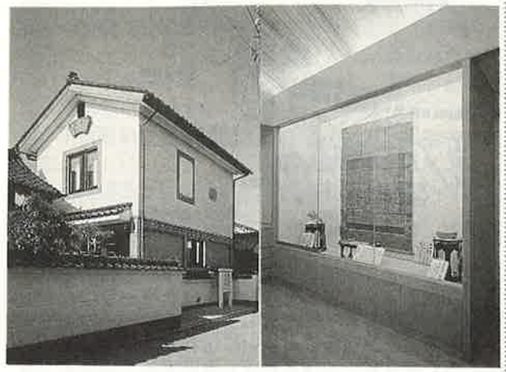
小野：スポーツの分野では、ある程度育った選手を、そのまま地元で育ててほしい……。なんか放り出されたような感じになりますね。

中山：富山の人たちに言いたいのはたった一つで、富山はとってもいいぞ、好きになったら外に向けて富山はいいぞって言ってみなよ。すがすがしいから。

天坂：私はそれ忠実に守って、富山の人と結婚してしまいました（全員爆笑）。

—1996年3月7日収録—

小さな村の小さな博物館



新湊市の海岸沿いの小さな村の、小さなお寺に、小さな博物館が出来ました。昨年夏のことです。

大宝寺の境内に建てられたこの博物館は「霊宝殿」と名付けられ、「村の博物館」として開放されています。

10坪位のホントに小さな博物館です。“小さい”とはいえ、内容・建物は本格的なものです。

歴代の住職が収集した書画・骨董品のなかには、市指定文化財となっている「阿弥陀三尊来迎図」をはじめ、池大雅、与謝野蕪村、徳川綱吉等の他、貴重なものが数多くあります。

また、建物は収蔵庫としての“蔵”をイメージしており、防火・防犯は無論のこと、湿気対策・褪色防止にも細心の注意がはらわれております。

この建設計画は大宝寺27代住職・龍本秀天氏の永年の願いであり、檀家の人達がそれを側面よりささえました。

住職の話によると、このような思いを持っているお寺は全国に数多くあるそうで、それらのモデルになるものをとの考えもあったそうです。

当地は浄土真宗の盛んな所ですが、時代の流れとともに、村におけるお寺の役割も変わりつつあり、このような博物館の建設によって生じてくるであろう新たなお寺の役割も見逃せないのかも知れません。

—㈱大林組富山営業所・川添　孝

聖域のなくなった現代住宅

20年近くもこんな仕事をしていると、今まで当たり前だと思っていたこが当たり前でないような気がして、ふと悩みこんでしまうことがある。例えば「住まい」。居間は家族みんなで集まるところだから明るくて風通しがよくて、広くて高くて庭が見えて、近所から覗かれなくて等々。確かに受けた教育もそうだったし、当たり前といえば当たり前。住宅の課題で北向きの居間は減点を覚悟しなければならない。端的に言えば「建築がわかっとらん」と評価される。

富山県礪波地方の典型的農家造りの家で育った私は日頃使わないお座敷や応接間（はなれ）が無駄に見え、そんな不満が建築を学ぶきっかけのひとつになったかもしれない。

戦後、清家清さんを筆頭に歩み続けた現代住宅の機能的快適プランは、今もなお日本国中のハウス団地に展開されている。しかし、よく考えてみると「・・さんの家」となるとそうも言えないことだってあるのでは。住まいは、そこに住む家族の「暮らし」を演ずるステージだとすれば、家族の生き様が空間として意識されなければならないと思う。主人が今後の人生計画の一大決心をする空間、お父さんが子どもたちを集めてお説教する部屋、叱られた子どもたちが逃げ込み独りになれるスペース等々。ある意味ではこんな空間も時は大切に思える。

そう言えば幼少の頃、薄暗い座敷で叱られ暗い蔵に逃げ込んでそれなりに悩んだり空想したものだ。あのころに戻りたいとは想わないが、懐かしさの中でよく考えれば、あの一見無駄な空間こそ非常に大切な意味を持っていたと想うのは私だけであろうか。

—㈱シグマデザイン建築設計事務所・所長　野手有二

「大都会の北部には、広大な新住宅街ができあがりました。そこには、まるっきり見分けのつかない、おなじ形の高層住宅がみわたすかぎりえんえんとつらなっています。建物がぜんぶおなじに見えるのですから、道路もやはりぜんぶおなじに見えます。そしてこのおなじ外見の道路がどこまでもまっすぐにのびて、地平線の果てまで続いています。」

ミヒャエル・エンデ『モモ』より

（信州大学大学院・松川智一）

福井支所だより

イス

“快適なイス”をお持ちでしょうか。海外の家庭を訪問するとテーブルのまわりに色々なイスが置いてあります。セットで置くのが一般的な私達にとっては新鮮な光景でした。話を聞くと自分の気に入ったイスでくつろぎたいからとのこと。なるほどと妙に感心したものです。

昨秋、私の所属する日本フリーランスインテリアコーディネーター協会で、60歳を緩やかな老化へのスタート地点と位置づけた時、身体の変化に対応できる「イス」が少ないのではという声が高まり、現状把握のため「60歳からのイス」というテーマで全国60歳以上の200人の方々に面接アンケートを行いました。

その結果、食事時にイスを使っている人は93%、くつろぎ用のイスがある人も84%と、かなりの高率でイスが生活に浸透していました。イスに関しての問題点を述べられた方は、海外生活の経験者かどこか不自由になりかけている方で、大半は声を大にする程でもないが、でも満足もしていないというものでした。

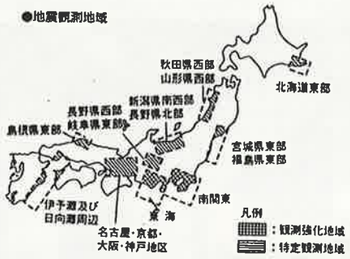
この200人の「こえ」と識者の方のご意見、協会の意見とをまとめて、現在市販されているイスの中から9点を選び、東京国際家具見本市で紹介しました。これが新聞で紹介されるや、その日のうちに問い合わせの電話が協会へ何十本もかかり、関心の高さと情報の少なさを改めて知りました。体に優しく美しいイスをもっと研究して欲しいものです。

足腰は確実に衰えることを忘れずに、じっくりと自分にとって快適なイスを捜してみて下さい。お気に入りが見つかれば必ず生活が変わると思います。

—インテリアコーディネーター・竹内幸子

長野支所だより

阪神淡路大震災に思う



地震というとてつもないエネルギーが、一瞬のうちに莫大な財産を奪ってしまった。

多くの住宅や業務施設あるいは伝統建築物等の被害に、今も被災地の皆様が相寄り血の滲むご苦労を続けられている困難を思うとき、一日も早い復興を願って止みません。

私は建築行政に携わる傍ら、『信州伝統的建造物保存技術研究会』の会員の一人として、とりわけ「歴史的建造物」の被った被害が残念でならない。

重要伝統的建造物群保存地区である北野町山本通地区や、神戸市内の伝統的な酒蔵群が壊滅的な被害を受けたことは、単に建築物の持つ財産的損失に加え、人々の心の中に残る「シンボリックな財産」の損失という面で大きいと思っている。

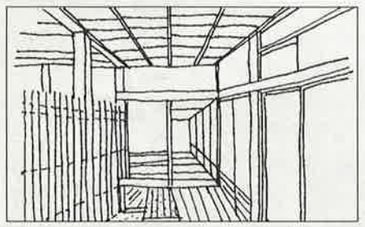
幸い神戸市では、これら指定された伝統建造物の他に現在未指定の候補群の修復にも、行政の補助枠が拡大されたと聞き、神戸市の英断に深く敬意を表したい。

ただ、これらの歴史的財産を地震という不可抗力から未然に防護できる制度が被災前に確立されていたらと思うのは私のひがみであろうか。

長野県は、京都府に次いで山口県と並ぶ重要伝統的建造物群保存地区の指定と、数多くの歴史的建造物があり、加えて無数に走る断層や構造線に囲まれている。

今行政に求められるものは何なのか、どのように行動を起こせばいいのかが現在の私の心境である。

—長野県住宅部・牧誠一郎



●雪国の土縁●

民家の土間は、外からの延長であり、雪国では縁側の外回りに土間が設けられていた。雪が多量に積ったときの冬場の食料や燃料を蓄えたり、物干し場に利用したりした。用と美を合わせもつこの土縁を現代風にアレンジし、もう一度復活させて見ませんか！？

（富山美術工芸専門学校・岡野加代子・森作恭枝）

新潟支所だより

新潟県文化財ネットワーク21

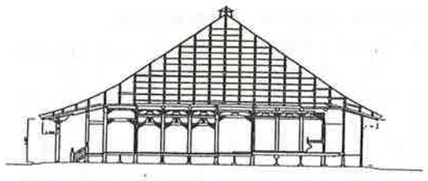
今年の春先は4月半ばといっても肌寒い日が続いていた。桜もまだ開花しない13日の土曜日、上越市高田の重要文化財浄興寺本堂を会場として「新潟県文化財ネットワーク21」の第3回大会が開かれた。このネットワークは、文化財の所有者、関係者が集まって情報を交換することを主目的として、2年前、川西町の重要文化財星名家住宅において結成された。近くにいても、お互いの情報が不足しているため、屋根茅が足りない、茅葺き職人がいないなどという状況であった。実は茅もあり、職人もいるのに。

第3回大会は「地域の歴史の掘り起こしを通して地域づくりを考える」のテーマのもとに、巻町の角田山妙光寺住職小川英爾さんの「寺は風景か」と題する基調講演に始まり、活発な報告や討論がおこなわれた。参加者は新潟県内を主として、岩手県、京都府などから合わせて百数十人であった。

報告・討論のなかでは、民家・寺院・町並みに関することが大きな部分をしめたが、もっとも圧巻であったのは、岩手県一関市から参加した村上和子さんの発言であった。村上さんの家は、この3月に岩手県の文化財に指定された。それまで15年にわたって、近所からこんなぼろ家をどうするのだ、馬鹿だアホだといわれながら、自分で屋根茅をかり、商売をして資金をつくり、女の手ひとつで、茅葺きの主屋をはじめとする数棟の附属屋を護り維持してきた。15年にわたる苦労は、文化財指定によるよろこびで償われたという。実践を語ることはなんと力強いことか。

参加者のなかには、若い茅葺き職人がおり、女性の参加者もことのほか多かった。文化財をとりまく状況が大きく転換していることを強く感じた。

—長岡造形大学・宮澤智士



会場となった浄興寺本堂の梁間断面図（正面28.2m、側面27.7m）

シリーズ北陸の酒～純米大吟醸？純純米大大吟醸？～

新潟に着任したのが一昨年の11月の私は、酒処新潟歴約1年7ヶ月、本当の酒の旨味が分かっているかどうかは別として、元来酒好き、そして日本酒党である。旨い肴と日本酒あり、と聞けば私を引き止めるものは何も無い。新潟が酒処とは知っていたがこんなにも旨い酒がたくさんあり、手軽に飲めるとは……、こちらに来てみて改めてびっくりした次第である。

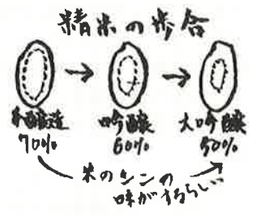
酒蔵さんへの利害関係抜きで私の好みを挙げさせてもらうとすれば、〆帳鶴、久保田、八海山、といったところであろうか。当然、まだ試していないお酒もあり、あと新潟に何年居られるかは分からないが、飲んだことのない地酒をすべてクリアーできるかどうか、楽しみとあせりを感じつつ今日は麒麟山を購入してみた。

ところで酒を飲む度に思うのが、酒の名前のサブタイトルみたいにくっついている「吟醸」や「大吟醸」、また「純米酒」、「本醸造酒」といった呼称が何を意味しているのか？、という疑問である。もやもやを解決する為に「新潟　地酒の旅」と「美味しんぼ　54巻」を参考にし、私の理解したところでは……

◎純米酒←→本醸造酒　というアルコール添加があるか、ないかによる区分と、

◎普通の酒→吟醸酒→大吟醸酒　という精米の歩合による違い

があることが分かった。当然、純米大吟醸酒もあるし、吟醸酒でアルコール添加されているものもあるそうである。（アルコール添加というとあまりよいイメージを持たないが、吟醸酒の場合、淡麗という風味を出す為に必要らしい。）



そんなお勉強をした上で、新潟の地酒麒麟山、の清酒、吟醸、大吟醸を飲み比べてみると、大吟醸は香り芳香で舌ざわりまろやか、そしてコクのある味わい、吟醸は癖がなく舌ざわり柔らかく清水に近い感じですっきりとしていた。清酒は先入観のせいか吟醸、大吟醸以上にアピールしてくるものなし、という利き酒結果となった。

今回残念だったのは純米酒を一緒に飲み比べられなかったことである。この記事をお読みの方々は酒を評する形容詞ばかりでは実感湧かないでしょうから、実践あるのみ。早速利き酒の旅へゴーして下さい！！。

—広報部会・松澤　茂

（福井工業大学院・深澤雄一郎）